

<教科：国語>

主体的に学びに向かう生徒の育成 ～【学びの選択】の位置づけによる「できた」「分かった」を実感できる授業づくり～

大垣市立星和中学校 教諭 平野 粧子

概 要

今の子供たちやこれから誕生する子供たちが、成人して社会で活躍する頃には、我が国は厳しい挑戦の時代を迎えていると予想される。特に、人工知能の進化は近年めまぐるしい。本校三年生の生徒の中にも人工知能を活用したことがある者は少なくない。

今、目の前にいる生徒たちが生きていくのであろう未曾有の状況の中で、求められる一人一人の主体性を国語の授業における【学びの選択】の位置づけを通して、育成したい。どんな場面でも生徒自身が課題意識をもち、課題解決に向けて行動できる人材に成長していくことを願う。そのために本研究は、生徒自身が課題を選択したり追求方法を選択したりすることで、教室にいる全員が「できた」「分かった」を味わえる授業づくりを目指して実践を重ねてきた。「ただやらされている勉強」という意識から生徒自身が「やってみたい」「もっと学びたい」と感じられるような手立てを打った授業の実践例である。

1. 主題設定の理由

(1) 本校の研究構想から

【本校研究主題】

主体的に学びに向かう生徒の育成～「できた」「わかった」を実感する学びを目指して～

本校では、上記のような研究主題のもと、「【学びの選択】の位置づけ」、「実態の見届け」の二つの視点から研究を行っている。これらの手立てをもとに基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等を育むとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かし多様な人々との共同を促す教育を目指している。

本研究では特に、「【学びの選択】の位置づけ」を【(1) 個人課題の選択】、【(2) 追究方法の選択】の二つに分けて実践した。

(2) 生徒の実態から

今年度、教科担任としてすべての三年生生徒に国語を指導している。今年度から新たに関わりをもつことになった生徒は、全体の5

分の2である。学年全体として、集団で頑張ること以上に個人で力を発揮していくことに強みがあると感じている。しかし、仲間に自分の考えを話したり、仲間の考えから自分の考えを広げ、深めていったりすることに苦手意識をもつ生徒が一定数いることも現状である。以下は、令和六年度全国学力状況調査の質問紙の回答である。

国語の勉強は好きですか

- ①当てはまる
- ②どちらかといえば、当てはまる
- ③どちらかといえば、当てはまらない
- ④当てはまらない

①	②	③	④
16.9%	28.6%	39.6%	14.3%

「どちらかといえば、当てはまらない」「当てはまらない」の合計は【53.9%】で、本校三年生の半数以上が国語の勉強が好きではないと解答している。その理由として以下の調査結果が関連していると考えられる。

国語の授業の内容はよく分かりますか

- ①当てはまる
②どちらかといえば、当てはまる
③どちらかといえば、当てはまらない
④当てはまらない

	①	②	③	④
本校	21.4%	55.8%	16.9%	5.8%
岐阜県	32.0%	50.8%	13.8%	3.0%
±	-10.6	+5	+3.1	+2.8

「国語の授業の内容がよく分かった」と感じている生徒が岐阜県の平均値と比較すると少ないことが分かる。つまり、本校の三年生の生徒の中には一時間の授業を終えて「今日はこんなことができた」「課題に対して自分の考えを表現できた」という実感のないままに過ごしている生徒がいることがわかった。

このことから、私は目の前にいる生徒たちに国語の授業を通して「できた」「分かった」という実感をもってほしい、「自分で課題を解決した」という自覚もてるようになってほしいと強く感じた。

二つの調査結果から、本校三年生の生徒の中には、国語の勉強に対して苦手意識をもっている生徒がいることがわかった。さらに、以下の調査結果も見過ごすことができない。

国語の勉強は大切だと思いますか

- ①当てはまる
②どちらかといえば、当てはまる

①	②
63.6%	26.6%

国語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか

- ①当てはまる
②どちらかといえば、当てはまる

①	②
61.0%	29.2%

90%以上の生徒が国語の勉強は大切で、かつ将来、社会に出たときに役立つと思っている。苦手意識をもつ生徒もいる中で「国語を学ばなくてはならない」という意識が多くの中での生徒の中で、育まれていることが分かった。

この調査の結果から、私は「苦手なことでも自分のためにやらなければならない」と感じていたり、苦しんでいたりする生徒が少なからずいることを実感した。このことは、今後国語科教員を続けていく上で考え続けなければいけない課題であり、授業を通して、子供たちにとって国語が「学ばなければいけないだけのもの」から「学びたいもの」になるようにしたいと考えた。

2. 願う生徒像

中学校学習指導要領国語編には、「今の子供たちやこれから誕生する子供たちが、成人して社会で活躍する頃には、我が国は厳しい挑戦の時代を迎えていると予想される。」と記載されている。特に人工知能の進化は近年目まぐるしい。そのことを実感している生徒は少なくない。授業で「ChatGPT」を用いた導入を行ったり、リクエストしたイラストを瞬時に生成する画像生成 AI を実際に生徒と使用したりしてみると、驚いている生徒もいれば使ったことがあると話す生徒もいた。今いる子供たちが生きていく、仕事に就く社会はまさに未曾有の状況であるだろう。そんな状況だからこそ、求められるのは「個人の主体性」であるのではないかと考える。「主体性」とはなにか考えたとき【自分で問題意識をもち、積極的に行動できること】と定義づける。本校の生徒たちに生涯にわたりどんな場面でもそんな人材になってほしい。国語の授業における【学びの選択】を通して、「今なにを学びたいのか」「自分はどう感じ、どう考えたのか」を明確にし、自分で課題解決の方法を見出し行動できる生徒を増やしたいと考え、本研究に取り組んだ。なお、【学びの選択】によって目指すのは「どんな生徒も主体的に学びに向かうことができる」ということである。前述した生徒の実態より、一から

課題を設定することを目指すよりも、教員が意図的に選択肢を提示し、まずはその中から生徒自身が選ぶ、という学習活動を続けていくことで課題意識をもつ力を養っていくことを目標とした。

私が願う生徒像を以下のようにまとめた。

- ・国語の授業の中で「できた」「分かった」を実感するために、自分で課題をもったりその課題の解決に向けて行動したりすることができる。
- ・【学びの選択】を繰り返し、自ら課題意識をもち、課題解決に向けて行動できる人物になり、どんな場面でも、主体性をもって行動できる力を養うことができる。

3. 研究仮説

【仮説】

授業計画の中で、【学びの選択】を意図的に位置づけ、「生徒自身が選択する」ということを繰り返すことで「やらされている課題」という意識から「学びたい・考えたい」課題へと意識が変わり、課題意識を自らもち、主体的に学びに向かうことができる生徒が増える。

4. 研究内容

I 説明的文章における読み深めの視点の選択による活動の明確化

II 探求方法の選択による学びの個別最適化

III 選択課題の提示による主体的に学習に向かう姿の育成

5. 研究実践

I について

「作られた「物語」を超えて」（山極寿一）では「C 読むこと ウ文章の構成や論理の展開、表現の仕方について評価すること」に関わる力をつけるために授業を展開した。学習指導要領によると、表現の仕方について評価するとは、「様々な表現の仕方が、文章の内容や書き手の考えを正確に伝えたり印象付けたりする上でどのような効果をあげて

いるかなどを根拠に基づいて判断し、その意味について考えること」である。よって、生徒たちに求める姿は、文章に使われている言葉や表現、展開を吟味し、筆者が伝えたいことを伝えるためにふさわしい表現かを考えることができる姿である。この姿に近づくために研究内容Ⅰを実践した。具体的な学習活動は以下である。

【追究方法の選択】

筆者の表現の工夫とその効果について、「叙述・展開・具体例」の三つの視点から一つ以上を選び、考えを形成する。

まず、本時の課題は

山極さんの表現の工夫について、そのふさわしさを考えよう。」と提示した。

そして、生徒は文章を読み深めるための視点を自ら選択し、ノートに位置づける。**叙述**は、文章中の言葉や表現の一つ一つに着目していく視点である。**具体例**は、文章に用いられた具体例を探しながらその効果を考える視点である。**展開**は、述べられている順番や述べられ方など文章全体を俯瞰して読み深める視点である。

このようにそれぞれの視点について生徒へ説明すると、生徒たちは自身の得意・不得意や興味・関心をもとに視点を選ぶことができた。この手立てによって、生徒たちは全体に提示された課題から、さらに課題を焦点化することができる。つまり「今は何を考えればよいか」が明確になる。一人で文章を読み深める時間に、身動きが取れない生徒は確実に減っていた。また、ノートに視点を位置づけることで、教員は机間指導の際に誰がどの視点で学んでいるかを把握することができた。これによって考えをノートに整理できていない生徒に個別指導する際にも、限られた時間の中での確に指導することが可能であった。生徒にとっても複数の生徒を見届ける教員にとっても、課題の焦点化は重要な手立てとなる。

それぞれの生徒は三つあるうちの一つの視点で読み深めているため、全体交流でそれ

それぞれの視点でどのような考えを形成したか確認した。叙述の視点を選んだ生徒の複数は文章中に「物語」という表現が多用されていることに気付いた。この生徒の気付きから授業を展開していった。

どうして「物語」が多用されているのだろう
という発問に対する考えの形成を、研究内容Ⅱの実践でも行っている。

この実践の、生徒一人一人が自身の実態に合わせて、学びを調整することができることも成果である。生徒の中には「違う視点からも考えたい」と視点を二つ以上選択して取り組む生徒がいた。視点を文章を読みながら変更する生徒がいてもよい。やっていくうちに気付きがあったり「分かった」と思う瞬間があったりして、それについて追究していけばよいのである。それを生徒の学習活動を見て感じさせられた。

Ⅱ について

【追究方法の選択】

考えたことを広げたり深めたりする場合での学び方を選択する。

Ⅱについては、多くの授業で実践を繰り返すことで生徒たちにこの学び方の定着を図った。基本的な流れは、一人で読み深める時間を経たのちに一人での時間を延長してもよいし周りの生徒同士で話し合ってもよい、席を離れて自身が交流したい生徒のもとに行き意見を話し合ってもよい時間を確保する。その時間の課題やねらいなどによってこの時間を変更した。



【仲間との交流をする生徒
や一人で追究をする生徒

写真1】

【追究方法の選択】の前に生徒たちに「成果が出せる方法を自分で選択してください」と声をかけると、まず席から離れ話をしにいく生徒もいれば、○の生徒のように一人で追究し続ける生徒の姿もある。隣の席の生徒

と少し話をしてから、一人の読み深めに戻る生徒もいる。この学び方による成果は、多様な主体性の姿を生徒たちが発揮できることである。「もう少し時間があれば、自分の考えを言語化できる」という生徒、「文章化できない自分の考えを声に出すことで整理し始められる」という生徒、「仲間の意見からどうにか自分の意見をもてるようにしたい」という生徒など、生徒自身がしたい学び方を選ぶことができた。苦手を減らしたり補い合ったりすることができる学びの手立てであった。また、学級経営の面からみても成果があったといえることができる。なぜなら、生徒たちが互いのどんな学び方も排除しない姿をみることができたからだ。先述した通り、一人一人の生徒には、その時自分がしたい学び方がある。例えば、仲間と交流したいと考え仲間の元に行く生徒Aがいる。その生徒が向かった先では、もう少し自分の力で考え抜きたいと願う生徒Bがいる。生徒Aは、話ができるか生徒Bに尋ね、生徒Bが「少し待って」と言えば、それを受け入れ近くにいる別の生徒と会話をし始めた。二人は互いの学び方を尊重しあっていただろう。また、多くの生徒が話し合いを通して考えを形成している中で、一人で考えている姿も生徒たちにとってはいたって普通なのである。人とのコミュニケーションが好きな生徒も苦手を感じている生徒も自分らしく頑張れる学級の雰囲気づくりに対する手立てであったとも言えるだろう。

【左側に座っている生徒は黙々と自身の力で考えを形成している 写真2】



Ⅲ について

【個人課題の選択】

学習活動の終盤に、新たな課題を提示し生徒自身が課題への取り組みを選択する。

この実践での【個人課題の選択】は、生徒が学びの充実感をさらに味わうための手立

てである。可能な限り、一単位時間に一つの個人課題を提示できるように実践を重ねてきた。



【個人課題を選択し、考えを形成した生徒の「深めるまとめ」

写真3】

「作られた「物語」を超えて」（山極寿一）の2／4時間目で扱った文章中に、子供のゴリラがドラミングをしている様子を伝える写真が付けられている。文章中にはゴリラのドラミングにはどのような働きがあるのかが述べられており、シルバーバックと呼ばれる大人のゴリラがドラミングをしている様子も写真で紹介されている。ここで筆者の表現として、ドラミングについて視覚的な情報で伝えるための写真であれば、子供のゴリラがドラミングをする写真はなくてもよい。どうしてわざわざ子供のゴリラの写真を載せているのだろうという課題を授業終了五分前に提示した。授業の時間内で、文章化できる生徒はほとんどいない。しかし、ノートを提出させると、この課題に対して考えを形成している生徒は学級の3分の1程度は見られたのである。【写真3】は、上記の課題に対するある生徒の考えである。この【個人課題の選択】では、五分の間に隣の席や生活班の仲間と課題について交流したり、一人で教科書を読み返したりノートに思いついたことを書き込んだりしている生徒たちの姿を見ることができた。上述したように授業の時間内で書ききことは難しいため多くの生徒が授業の時間外で取り組んでいる。授業終了後の休み時間に、「なんでだと思う？」という会話が聞こえてくることもあった。この課題に取り組む生徒たちの多くは、教科書の文章に改めて立ち返る必要があり、自身の経験や知識と重ね合わせ根拠を探しながら、考えを形成することができた。また、文学的文章での【個人課題の選択】における実践では、さらに生徒自身の想像力を広げながら、考えを形成している姿を見ることができた。

「握手」（井上ひさし）では、作中の三度の握手から〔ルロイ修道士〕の人物像について読み深めた。作中には読者の印象に強く残る事物として〔プレーンオムレツ〕が描かれている。主人公と〔ルロイ修道士〕が久しぶりに再会する場面で、〔ルロイ修道士〕が注文するのであるが、ちっとも口には運ばない。授業の展開では、握手という行動に焦点を当てたが、生徒たちにとっては気になる描写であることから、【個人課題の選択】として、ルロイ修道士はどうしてプレーンオムレツを注文したのだろうと提示した。この課題については、考えを形成している生徒が普段の【個人課題の選択】よりも多かった。このこともこの実践の成果であるだろう。習熟度に関わらず、「やってみたい」と思わせられる課題を提示することができれば、生徒たちは主体的に課題に向かうことができた。

以下は、この課題に対するある生徒の考えである。

わざわざ西洋料理店に来たのに、オムレツを頼んでいるのは、軽くて食べやすく食欲がなくても食べられると、ルロイ先生が考えたからだと思う。ルロイ先生は病気で「私」に気付かれずに、元気な姿を見せて最後の別れにしたかったのだと思う。

授業の中で、生徒たちはルロイ修道士が、教え子たちに最後の挨拶をしてまわっていることを読み取っている。今のルロイ修道士は病気を患っており、かつて幼かった教え子たちと交わっていたような力強い握手をすることは到底かなわぬことであると読み深めた。それでも、ルロイ修道士は教え子たちに心配をかけぬようふるまっているということに気づき、自分の中に落とし込んだ生徒であるからこそ、上記のような課題に対する考えを形成できているのだろう。

この【個人課題の選択】を授業では「深めるまとめ」と呼んでいる。多くの単元で繰り返し行うことで、生徒に活動が定着していくことをねらった。すると、少しずつだが取り組んでいく生徒が増えた。あえて述べておく

が、これは宿題ではない。生徒にも「主体的に取り組めるのであれば、ぜひ考えてほしい」と伝えている。この活動も「やらされている」意識から「やってみたい」に生徒の意識が変わっていくことを願い、それが少しずつ広がっていったと感じている。

6 成果と課題 (○・・・成果、●・・・課題)

【仮説】

授業計画の中で、【学びの選択】を意図的に位置づけることで、生徒自身の選択を繰り返すことで「やらされている課題」という意識から「学びたい・考えたい」課題へと意識が変わり、課題意識を自らもち、主体的に学びに向かうことができる生徒が増える。

I より

○生徒が提示された課題から、自身の学びを選択することで「今やるべきこと」が焦点化され、多くの生徒が課題意識をもつことができた。単位時間によっては、全員が課題をもつことを教員が見届けることができた。

○「三つの視点の中から一つ以上選ぶ」という個数的な自由度があったため、生徒自身が実態に合わせて複数の課題を選択することもあり、より主体的に取り組むことができた生徒がいた

●視点の選択に留まり、読み深めに向かえない生徒がいた。

II より

○生徒自身が、「今、この方法で学びたい」という意欲をもち自身が成果を出せる学び方を選択することができた。

○それぞれの生徒が互いに話をしやすい相手を選んだり、話を聞きたいと思う生徒を選んだりして交流することで、形式にとらわれない交流活動ができた。

○一人で読み深めることに苦手意識をもつ生徒も、そのままにせず自分から仲間の元へ考えの交流に向かっている姿が多くあった。

●課題によっては、時間を持て余している生徒が見られた。

III より

○生徒が「やってみたい」「どうしてだろう」と知的好奇心をもち、授業時間外でも自分の考えを形成することができた。

○授業内容と関わらせて、【個別課題】を提示することで、生徒の習熟度に関わらず多くの生徒が、主体的に取り組む課題に挑戦することができた。

●個別課題を選択している生徒が、自主的に取り組もうという気持ちがある生徒だけにとどまっている。

7 おわりに

以上のことから、仮説に基づき行ってきた実践については、たしかに多くの成果を得ることができた。多くの生徒が「今、何を学ばなければいけないのか」を自覚し、その課題の解決に向けて「何をしなければならないのか」を自身で選択し課題解決に向かうことができた。しかし、「教室にいる全員が主体的に取り組むことができる」という点についてはどの手立ても改善の余地があるため、今後の自身の課題としていきたい。

【参考文献】

「中学校学習指導要領解説 国語編」文部科学省、平成三十年、株式会社東洋館出版社